
父の大事な話

えんぴつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父の大事な話

【Nコード】

N9308B

【作者名】

えんぴつ

【あらすじ】

男手ひとつで育てたひとり息子が、いよいよ明日、大学の入学式という夜、父はどうしても息子に言わなければならないことがあった。世襲問題に一石を投じる(？)父子の掛け合い漫才！

父・鉄男は悩んでいた。

いや、正確には困っていた。

とうとうズルズルと今日まで言えずに来たが、明日は一人息子・鉄太の大学の入学式だ。

今日、話さなければマズイ。

すべてをあいつに伝えなければ――。

「なんだよ、オヤジ。俺、忙しいんだよなあ。明日の支度とかもあるしさ」

「まあ、ここに座れ。父さん、お前に大事な話があるんだ。ま、その、なんだ、とにかく一杯やるか」

「どしたの？　なんか結婚式前夜の花嫁の父みたいだぜ」

いつもは息子の軽口に笑う父だったが、今日は重苦しい空気が流れていた。

「父さんな、実は父さん……。そうだ、父さんはもうお前の歳にはラーメンの屋台牽いて働いてたんだぞ。それで母さんと知り合って、一緒になって、自分の店を持ちたい一心でがんばって働いて、それで苦労してやっとここに店を構えたのが22年前だ」

「珍しいな。オヤジがそんな昔話するの」

「いや、今日はどうしてもお前に言っておきたいことがあってな。当時はウチの店の隣りが大きな鉄工所でな、その従業員が食べに来てくれて、繁盛したんだよ」

「父さんも母さんも汗だくになって1日中働いてなあ、でも辛いなんて思ったことはなかったぞ。愛する母さんのため、これからできるだろう子供たちのため、希望に満ちあふれていたからなあ」

「お前はどうかんだ、鉄太。明日、入学式とか言ってるけど、ちゃんと希望もって大学に行くのか。1浪して、あんな3流大学に」

父・鉄男は、前々から息子が入学する、その聞いたこともない大学が気に入らなかった。

「なんだよ。結局その話かよ。明日は入学式なんだぜ。気持ちよく寝かせてくれよ」

「あ、いや、そんなつもりじゃなかったんだが。すまん。父さん、一生懸命ラーメン作って、それを母さんが笑顔でお客様のテーブルに運んで、ホント、母さんもよくやってくれたんだよ。それが、それが、父さんいまだに悔しくて……」

「なんだよ、今度はそっちの話かよ。もうやめてくれよ、未練たらしいなあ。しょうがねーだろ、男作って出ていつちまったもんわよ。2歳の俺を捨てて出ていつちまったんだぜ。そんな女の話、聞いたくねーよ。しまいにや怒るぜ」

鉄男の妻であり、鉄太の母であった女は、岡持ちを持って出前に出たつきり帰って来なかった。

捜さないでください、との書置きを残して。

17年前のことだった。

「すまん、父さん、お前が立派に育ってくれたんで、なんていうか感傷的になっちゃった。そうだな、あの女の話はやめよう」

「それから父さん、なにもやる気が起きなくなつて、店閉めて、ただボーツとしてたつけ。酒に溺れそうにもなつたよ。そう言えば、夜泣きするお前をおぶつて、踏み切りに飛び込んだんじゃおうかと思つたこともあつたなあ。深夜でもう電車走つてなかったけど。もっと早い時間からお前が泣いてくれてたら……」

「ちょ、ちょっと。死ななくてよかったんじゃん。電車来なくて俺、立派に大学生になつたんだからさあ」

「いや、それからも苦勞の連続だよ。お前のオムツ替えてて、ウンチが付いた指でラーメン作つたら、客に文句言われたりさあ。いるんだよ、クレーム付けるのが趣味みたいなヤツが」

「それは手を洗おうよ。客が正しいって」

「あー、一番、大変だったのは隣りの鉄工所が移転しちゃった時だなあ。あれはお前が幼稚園の頃だったかなあ。なんせウチの売上げの8割は鉄工所関係だったから、もうガクーンって売上げ落ちてなあ。暇でさあ、毎日お前の自転車の練習に付き合ってたなあ。父さ

んのおかげだぞ、お前が自転車乗れるのは」

「俺、それに感謝しなきゃいけないの。ほっときゃだれでも乗れるようになるってば」

「でも、3ヶ月もしないで、跡地に当時としては大きなパチンコ店ができて、父さんこれでまたお客がたくさん来るって喜んでなあ。お前にファミレスでハンバーグステーキを食わせたら、お前一口も食わないうちに床に落としちゃってなあ。あん時はさすがの父さんもキレたなあ。満員の店内でお前に往復ビンタしてやった。バシッバシッって。父さん、こう見えてもやる時はやる男なんだぞ」

「なんだ、その自慢は。しかも殴られた本人に向かって。せつこいことで人、殴りやがって。そう言えば、小学生の時、お客の残したラーメン食いたくないって泣いて、よく殴られたよなあ。よくグレずにまっすぐ育ったもんだ」

「いつそ、グレてくれればよかったのに。大学なんか行かないで」

「ん？ なに小声でしゃべってんだオヤジ！」

「いや、なに、こつちの話だ。でもなあ、隣りにパチンコ店ができたのはいいんだけど、ぬか喜びっていうの？ ショックだったなあ、パチンコ店の駐車場にラーメン屋ができたがんの。開店の日に行つて、スープにゴキブリ入れてやったよ、父さんは」

「マジかよ、オヤジ」

「ウン」

「俺、行くぞ。忙しいんだからよお」

「だから、そのくらい悔しかったってことだよ。パチンコの客でいつも満員のその店を見ては、食中毒で営業停止になりますようにって祈ったのはホントだけど」

「つくづく器が小さいねえ、オヤジは。普通は努力するだろ。客を集める努力をよお」

「バカ言っちゃいけないよ。父さんだっているいろしたさ。札幌ラーメンが流行れば、札幌ラーメン。博多ラーメンが流行れば、博多ラーメン」

「俺も覚えてるよ。店名替えただけじゃねーか。子供心にすげー恥かしかつたよ」

「でもなあ、そんな父さんにも幸運が訪れてなあ。そのラーメン屋、パチンコに負けた客が腹いせに火を着けて全焼。ありや笑った」

「他人の不幸で笑うなよ。あんたの息子であることがイヤになってきたよ」

「親に向かつてなんてこと言うんだ、お前は。父さん、そんな子に育てたつもりはないぞ」

「じゃあさあ、どんな子に育てるつもりだったんだよ。運動会のお弁当、毎年、ラーメン出前して来やがって」

「ちゃんと延びないように気を使っただぞ」

「そついう問題じゃねーだろ」

「じゃ、最後に聞くけど、どうしても大学に行くのか？ 父さんの店を手伝う気はないか？ あ、そうだ、父さんの店の中にお前の店を作って、ラーメンのテーマパークにするか」

「なるか、ボケ！」

「で、オヤジ、なに隠してるんだよ。あの女が俺に会いたいと言っても言ってきたのか？ 入学祝いでも渡したいとか。俺いらねーよ。親はオヤジ1人だからよ」

「あ、いや、パチンコで負けて、お前の入学金、振り込んでないってことが言いたいだけ……あ、言っちゃった。アハ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9308b/>

父の大事な話

2010年10月15日23時36分発行